

# 乙 貞

お と さ だ

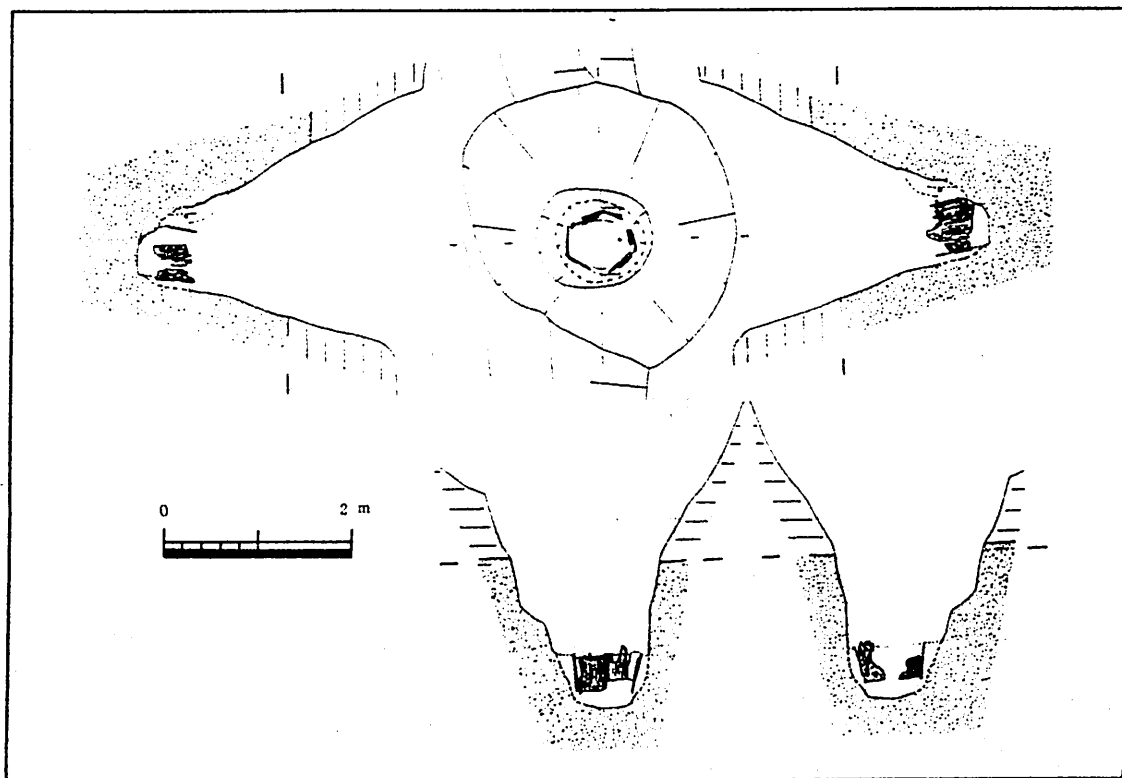
第84号 通巻15巻 第5号  
1996年 2月1日 発行

守山市立埋蔵文化財センター  
☎0775-85-4397

〒524-02  
守山市服部町2250番地

## ☆ 井戸が掘られた年代 ☆

昨年12月末に終了した<sup>じのあぜ</sup>二ノ畦・<sup>よこまくら</sup>横枕遺跡の発掘調査の最終調査区で、2基目の<sup>わくざい</sup>井戸が残り、発見されました。1基目は、前回の『乙貞』に紹介したもので、井戸底より40cm程上の部分に四角く<sup>よこさん</sup>横棧が組まれ、周囲に<sup>たていた</sup>縦板が打込まれた状態のものでしたが、今回のものは、横棧が残っておらず、縦板が9枚<sup>すいちよく</sup>垂直に打ち込まれた状態で残っていました。板材は、かなり<sup>いた</sup>傷んでいましたが、その内の1枚は<sup>まさめ</sup>桎目板で、樹木の表皮に近い部分(<sup>へんざい</sup>辺材)が残っていたので、年輪を調べた結果、この板材が紀元前60年に<sup>はっさい</sup>伐採されたことが判明しました(年輪年代学)。前回の井戸桎材の2枚は、ともに伐採年代が紀元前97年で、今回のものとは、37年間のひらきがありますが、これらの井戸桎材3枚から得られた<sup>れきねんだい</sup>暦年代は二ノ畦・<sup>かんごうしゅうらく</sup>横枕遺跡の環壕集落の開始時期を考える重要な手掛りになるものです。



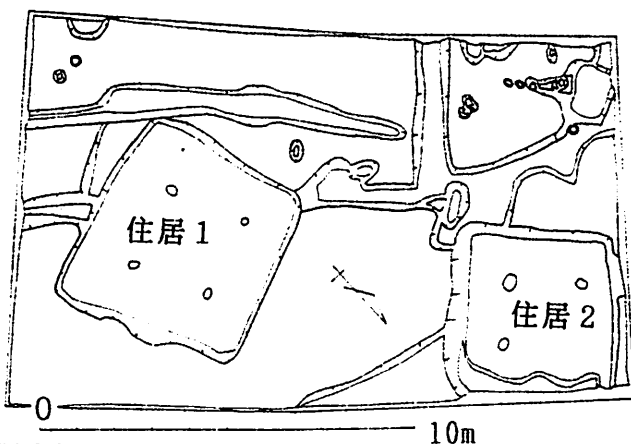
☆ 発掘調査だより ☆

SSS SSS SSS 調査終了 SSS SSS SSS

1. 岡 遺 跡

調査地 岡町字寺前  
 調査面積 約 160 m<sup>2</sup> (開発面積 760 m<sup>2</sup>)  
 調査期間 12月20日～1月16日  
 調査実施の理由 共同住宅建築

個人の共同住宅建築に先立ち発掘調査を行ないました。現地表下約60～70cmで古墳時代中期の竪穴住居2棟と溝、ピットを検出しました。調査地は南から北、東から西に徐々に土地が低くなっていて、古墳時代後期の土器包含層を除去したのちに集落跡が見つかりました。竪穴住居は、一つが4.5mから5mの方形住居で、中央やや西寄りに<sup>ろ</sup>炉があります。他の一つは、一辺が約3mで、中央に黄灰色の粘土を<sup>は</sup>貼りつけ、その中央に<sup>ろ</sup>炉がありました。また天井を支える柱の跡は、はっきりとはわかりませんでした。当時、生活した床面に残っていた土器から4世紀の中頃から後半にかけて営まれた住居だと考えられます。(山崎)



2. 酒 寺 遺 跡 (第36次調査)

調査地 播磨田町平成の里3001  
 調査面積 約 500 m<sup>2</sup> (開発面積 845 m<sup>2</sup>)  
 調査期間 11月24日～12月28日  
 調査実施の理由 <sup>てんぽ</sup>店舗建築

今回の調査地点は、隣接する道路の調査が以前に行なわれており、周辺一帯が弥生時代から古墳時代にかけての墓域であることが知られています。今回の調査では、6基の方形周溝墓と土壇、柱穴が見つっています。これらの周溝墓のなかで全容のわかるものは4号墓のみで、他はすべて調査区外に広がっていますが規模は大きいもので一辺約10m、小さいものでは一辺約3.5mあります。周溝の

深さは浅いもので20cm、深いもので90cmありました。特記すべきは、4号墓で、埋

葬施設が確認されたことです。残  
存状態があまりよくないのですが、  
墓穴の埋もれ方から木棺墓の可能  
性が高いと思われます。周溝墓の  
時期は出土した土器から1～5号  
墓は弥生時代中期、6号墓は古墳  
時代前期と考えられます。(木村)

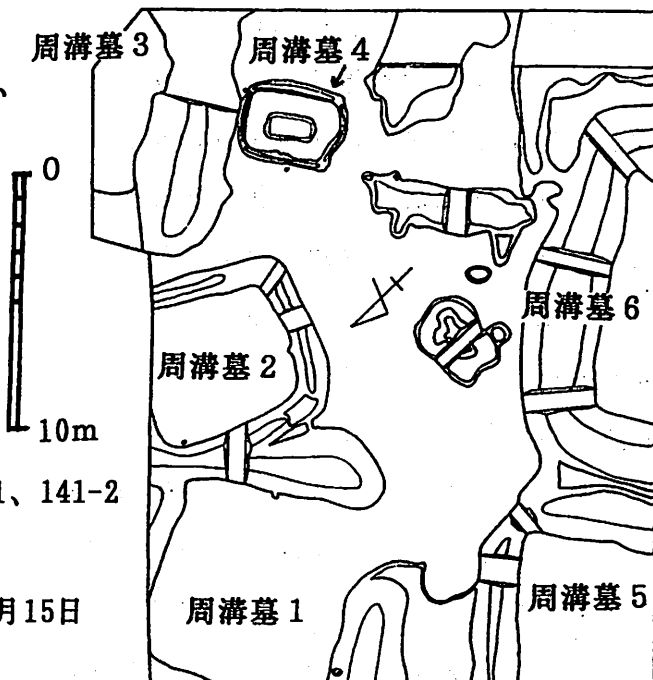
### 3. 二 町 鏡 遺 跡

調査地 二町町字堂ノ内141-1、141-2

調査面積 約 1,120 m<sup>2</sup>

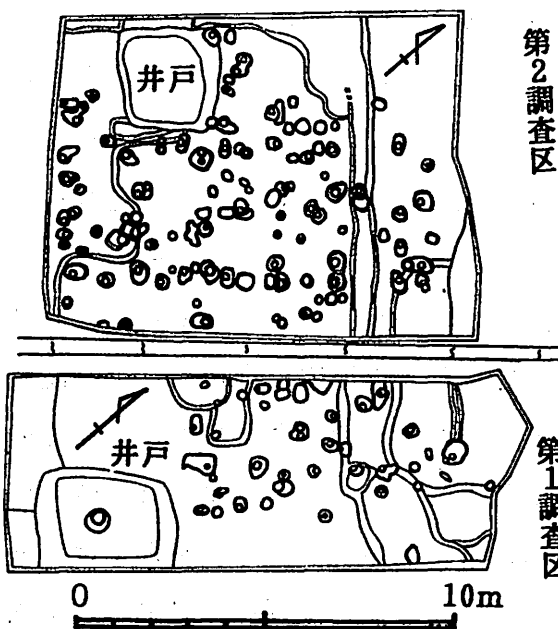
調査期間 7年11月21日～12月15日

調査原因 宅地分譲



昨年11月から12月にかけて、二町町地先において発掘調査を行いました。対象地  
は、6区画に造成されていて、4区画は既に平成5年に調査を終えており、今回  
は残り2区画 360m<sup>2</sup>を調査しました。周辺の調査では、鎌倉時代～室町時代に  
かけての集落が見つかっています。集落内には、方形の濠を巡らせ区画した屋敷地  
があり、その中には母屋、副屋を建て、井戸を設けた「家」が整然と建ち並んで  
いたことが調査によって明らかになって

きました。今回の調査地も屋敷地内にあ  
たり、図のとおり掘立柱建物の柱穴、区画  
溝、そして井戸を検出しました。第1調  
査区の井戸は、井筒に桶を使っている、  
第2調査区の井戸は、廃絶する前に木枠  
井筒を抜き取ったらしく、その痕跡は確  
認できませんでした。建物については、  
調査地が狭いため位置や規模などは特定  
できませんが、これまでの調査で検出し  
た建物とほぼ同方位になる北東-南西方



向に建てられていたこと、建物柱穴は重複が激しく幾度かの建て替えがあったことが分かります。また、検出した遺構からは黒色土器碗、土師器皿、陶磁器類が出土しています。調査地周辺では今後も多くの発掘調査の機会が見込まれ、近い将来、二町町に営まれた中世集落の全容も明らかになるものと思われます。(岩崎)

#### 4. ニノ畦・横枕遺跡 (第27次調査)

調査地 下之郷町字向八代1-1番地

調査面積 約2,100㎡

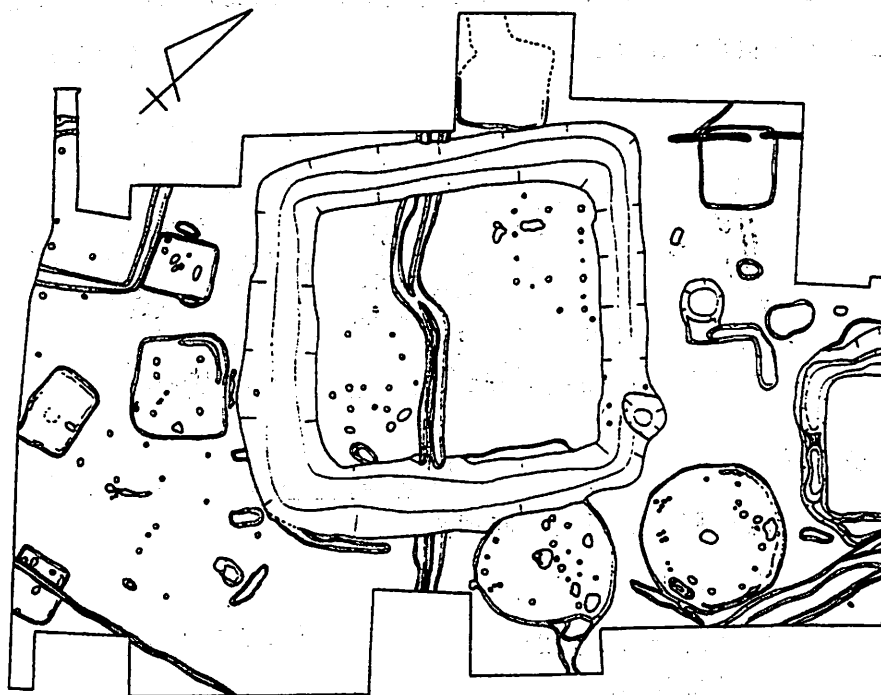
調査期間 6月15日～12月20日

調査実施の理由 店舗建築

野洲町との市町境で行っていた発掘調査は12月末をもって終了しました。今回の地点は、遺構の密度がかなり高く、弥生時代中期から平安時代にかけての遺構が重複して検出されました。土地利用の仕方を時代別に整理すると、弥生時代中期末には環壕集落が展開していて、弥生時代後期から古墳時代前期にかけては方形周溝墓群が造営され、古墳時代中期以降は、部分的に水田開発がなされています。古墳時代の水田跡、弥生時代の集落のことについては、前回、前々回の『乙貞』に書きましたので、今回は調査された方形周溝墓群について紹介します。ニノ畦・横枕遺跡のなかでは、これまでに遺跡地の西隅で2基の周溝墓が確認されていましたが、それ以外では見つかっていませんでした。今回は遺跡地のなかでも東隅、野洲町側の野洲川左岸遺跡に隣接する部分です。発見された6基の方形周溝墓は、野洲川左岸遺跡で検出されている40基近い周溝墓の墓群として、一連の流れのなかで解釈されるのが適切です。6基のうち5基は台状部の一辺が10m前後で、市内で一般的に見つかる弥生時代の周溝墓のサイズですが、1基は、一辺が20m近い巨大なものがあります。台状部の主体部や盛土(墳丘)は、削平され残っていませんでした。周溝は深さ約1.5mも掘られ、幅は約4mもありました。周溝内に堆積した土を観察することで、台状部の盛土の存在を検討しましたが、その状態からは、小高く積上げる古墳のマウンドのようなものは想定できませんでした。造墓された時期は、周溝内より出土した土器より古墳時代前期と考えています。この時期には、竪穴式石室や墳丘を持つ古墳が各地で造営されていますが、今回の周溝墓は、平面規模で古墳に引けをとらず、弥生時代に

は例を見ないものを誇っていますが、未だ弥生時代以来の方形周溝墓と同様に、他の墓とともに群れをなしていることから、弥生時代の墓制の伝統を保持しているものと考えられます。また削りとられているため不明な点が多いのですが、埋葬施設も弥生時代のそれと大きく異ならないと思われる点で、共同体の一般成員から隔絶し、強大な指導力を発揮する首長にまでは成長しきれていない状態を示しているものとも考えられます。

(川畑)



# 5. 古高遺跡

調査地

大門町字高樋

調査面積

約 2,300 m<sup>2</sup>

調査期間

10月20～12月10日

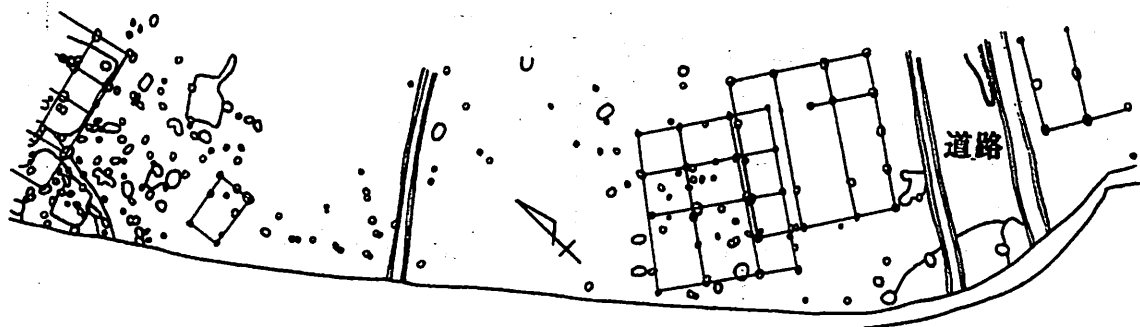
調査実施の理由

宅地造成

平成7年10月中旬から進めていました古高遺跡の調査が終了しました。調査地の概要として、東側に弥生時代中期末の方形周溝墓2基と平安時代前期の掘立柱建物3棟、中央から西にかけては平安時代後期から鎌倉時代後期の掘立柱建物が4棟以上見つかりました。今回は、この中央から西側にかけての建物跡の概要を報告します。図面の東側には溝が幅5mの間隔2条並んでいて、その西側に建物が2棟、さらに30m離れて溝が1条あり、その西側に建物が2棟以上集中する

ことがわかりました。東側の溝2条と建物は並行しているので、幅5mの部分は道路の可能性あります。また西30mの溝までは一つの屋敷の大きさを示しているのではないかと考えています。平安時代のこのような区画は数少なく、当時のムラの大きさや一つの屋敷の大きさを探るうえで貴重な成果です。西端の建物は方向が異なるのでやや新しく、鎌倉時代のもので、鉄剣や土錘（網のおもり）も出土していて興味のもたれる集落跡です。この時期のムラは更に大門町の集落側に広がっていることが予想されます。

(山崎)



## 6. 欲賀南遺跡

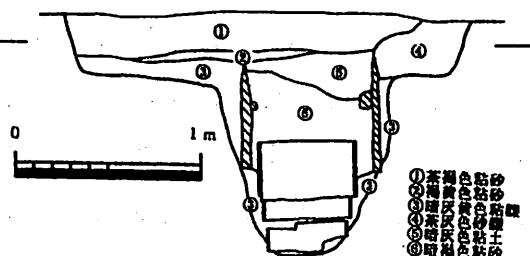
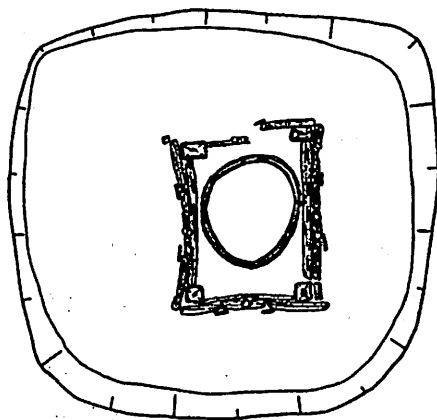
調査地 欲賀町字上高座、向垣内

調査面積 約 810 m<sup>2</sup>

調査期間 10月1日～12月22日

調査実施の理由 ほ場整備事業

0 20m



平成4年から始まった ほ場整備事業にかかる調査は、今回の地点で終了しました。全体23haの整備計画のうち、調査した面積は約20,000m<sup>2</sup>を越える規模となりました。今回の調査地点は、畑として耕作されていて、表土に遺物の散布が認められていた場所です。遺構は厚い包含層の下で、砂利層をベースに、土壌、溝井戸と多数のピット等が検出されました。このうち井戸は、一辺約2mを測る掘り方の真中に井戸枠として幅約24cm、厚さ約4

①茶褐色粘砂  
②黄褐色粘砂  
③黄褐色粘砂  
④黄褐色粘砂  
⑤黄褐色粘砂  
⑥黄褐色粘砂  
⑦黄褐色粘砂  
⑧黄褐色粘砂  
⑨黄褐色粘砂  
⑩黄褐色粘砂  
⑪黄褐色粘砂  
⑫黄褐色粘砂  
⑬黄褐色粘砂  
⑭黄褐色粘砂  
⑮黄褐色粘砂  
⑯黄褐色粘砂  
⑰黄褐色粘砂  
⑱黄褐色粘砂  
⑲黄褐色粘砂  
⑳黄褐色粘砂  
㉑黄褐色粘砂  
㉒黄褐色粘砂  
㉓黄褐色粘砂  
㉔黄褐色粘砂  
㉕黄褐色粘砂  
㉖黄褐色粘砂  
㉗黄褐色粘砂  
㉘黄褐色粘砂  
㉙黄褐色粘砂  
㉚黄褐色粘砂  
㉛黄褐色粘砂  
㉜黄褐色粘砂  
㉝黄褐色粘砂  
㉞黄褐色粘砂  
㉟黄褐色粘砂  
㊱黄褐色粘砂  
㊲黄褐色粘砂  
㊳黄褐色粘砂  
㊴黄褐色粘砂  
㊵黄褐色粘砂  
㊶黄褐色粘砂  
㊷黄褐色粘砂  
㊸黄褐色粘砂  
㊹黄褐色粘砂  
㊺黄褐色粘砂  
㊻黄褐色粘砂  
㊼黄褐色粘砂  
㊽黄褐色粘砂  
㊾黄褐色粘砂  
㊿黄褐色粘砂

cmの縦板を四方に打ち込み、その内側を横棧で補強しています。その枠の内側には、薄い縦板材を円形に打ち込み桶を作り、その直下に曲物を2段に組んでいました。曲物の中からは黒色土器や箸が出土したほか、井戸底から直径20cmの底板のついた小型の曲物も出土しました。このような出土例は、横江遺跡や伊勢遺跡の井戸でも見つかり、祭祀に関係した遺物ではないかと考えられます。

(畑本)

## SSS SSS SSS 調査中 SSS SSS SSS

### 7. 伊勢遺跡 (333)

調査地 伊勢町字大苗代 302・304-7番地  
調査面積 約 500 m<sup>2</sup> (開発面積 1,321 m<sup>2</sup>)  
調査期間 12月20日～2月初旬予定  
調査実施の理由 共同住宅建築

日本バイリーンの工場隣地において発掘調査を行ないました。今回の地点は、伊勢遺跡の北端にあたり、調査をはじめるとあって、弥生時代後期の環壕もしくは集落の外側にひろがる周溝墓群が検出されることが予想されましたが、現状の耕作土を削平し、弥生時代の生活面を検出した結果、杭もしくは小さな柱跡が数箇所確認されたのみでした。また、弥生時代の遺構検出面より約40cmほど下で縄文土器の細片が採取されたので、この地点まで掘り広げたところ、縄文時代のものと思われるピットと土壌が数箇所で見つかりました。

(川畑)

### 8. 今市遺跡

所在地 播磨田町字下左城1252-1、1253-1、1254-1番地  
調査面積 約 3,000 m<sup>2</sup>  
調査期間 7年12月20日～8年3月20日(予定)  
調査原因 宅地分譲

昨年12月から播磨田町地先で今市遺跡の発掘調査に着手しています。場所は播磨田町北辺の県道栗東一大津線(琵琶湖大橋取付道路)と現在工事中の道路との交差点の南隅に位置し、下左城団地に北側に接する水田地です。現在工事中の道路も県教育委員会によって発掘調査が行われ、弥生時代中期の方形周溝墓が見つかりますが、今回の調査地でも現在2基検出し調査中です。

(岩崎)

## 9. 塚之越遺跡 (第10次調査)

所在地 古高町字北林 他

調査面積 約 4,500 m<sup>2</sup> (開闢地 18,134 m<sup>2</sup>)

調査期間 7年10月24日～8年3月31日 (予定)

調査原因 宅地造成

今回の調査は大規模なもので、塚之越遺跡の全体像の解明が期待されています。現在までに、今年度の調査予定のおよそ8割程調査が終わりました。調査でわかった遺構は、新しいものから、中世の溝1条、掘立柱建物5棟、井戸1基、古墳時代後期の溝5条、弥生時代後期の方形周溝墓2基、また基盤となる層(地山)には、縄文時代の遺物が含まれています。このように塚之越遺跡では、各時期にわたり遺構が発見されています。これらを時代別に整理していくと、中世に関しては、遺跡地のなかでも東側にあり、多数の館跡や井戸跡が見つかっている二町鏡遺跡との関連で、弥生時代後期から古墳時代にかけては、集落跡や水田跡が見つかっている下長遺跡や松塚古墳、狐塚古墳そして方形周溝墓が多数発見されている栗東町の緒遺跡などと合わせて考えていく必要があります。もちろん塚之越遺跡内での各時代の遺跡の検討を進めることは言うまでもありませんが、周辺遺跡や地形と合わせて考えることによって、より具体的な歴史の姿が浮かび上がってきます。例として弥生時代後期から古墳時代初頭の古高町周辺の様子は、塚之越遺跡、緒遺跡が丘陵上に立地し、墓域として使われ、下長遺跡は低地で、川を中心に村を営み、水田を耕していたことがわかっています。したがって両者の関係より、この時期の人々の土地の利用方法やムラのあり方がわかり、言うならば弥生時代から古墳時代にかけてのムラのモデルとして考えることもできます。

(佐々木)

## 10. 二ノ畦遺跡 (第5次調査)

調査地 守山町吉身4丁目字宮ノ北 617 他

調査面積 約 2,500 m<sup>2</sup> (開闢地 2,985 m<sup>2</sup>)

調査期間 12月1日～5月予定

調査実施の理由 宅地造成

二ノ畦遺跡は、吉身町と野洲町の一部周辺を中心に広がる弥生時代から古墳時



代にかけての集落跡であることが知られています。これまでの近辺の調査で、古墳時代前期の竪穴住居や溝が見つっています。今回の調査区では、南北方向に中世以降と考えられる耕作痕が見られ、その他に溝、掘立柱建物、土壇、柱穴、溝状の浅い落込みが確認されています。出土遺物が少なく断定はできませんが、古墳時代前半の溝が数条と奈良時代と思われる掘立柱建物があります。現在も調査中であり、次号にてお知らせしていきたいと思ひます。(木村)

## 11. 古高城遺跡

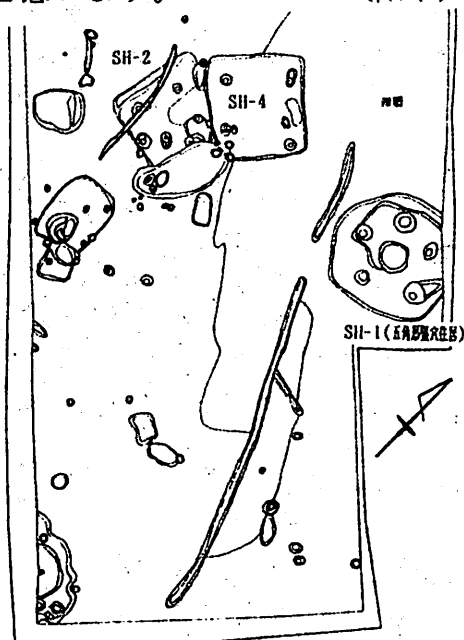
調査地 古高町字東円前29番地  
調査面積 約 1,479 m<sup>2</sup>  
調査期間 1月22日～3月末 予定  
調査実施の理由 宅地造成

市営住宅のすぐ西側で宅地造成に伴う調査を開始しましたが、現在表土の掘削中です。古高城遺跡は字円前、東円前、西円前付近を中心にした中世の城と考えられていますが、城の実態はよくわかっていません。発掘調査はこれまでに4回行っており、希薄ながら中世の遺構、遺物が見つっていますが、城に関するものではありません。今回の調査に期待したいと思ひます。(畑本)

## 12. 吉身西遺跡

調査地 守山町字510番地他  
調査面積 約 3,000 m<sup>2</sup>  
調査期間 11月1日～3月予定  
調査実施の理由 市民病院建築

市民病院新築にともない、市民病院の西側駐車場を調査しています。これまでに弥生時代後期の竪穴住居1棟(SH-1)をはじめ古墳時代前期の竪穴住居2棟(SH-2, 3)、古墳時代後期の竪穴住居1棟(SH-4)などがみつっています。このうち、弥生時代後期の竪穴住居は、平面の形が5角形をしためずらしい住居で、柱の穴も住居の形に対応するように5

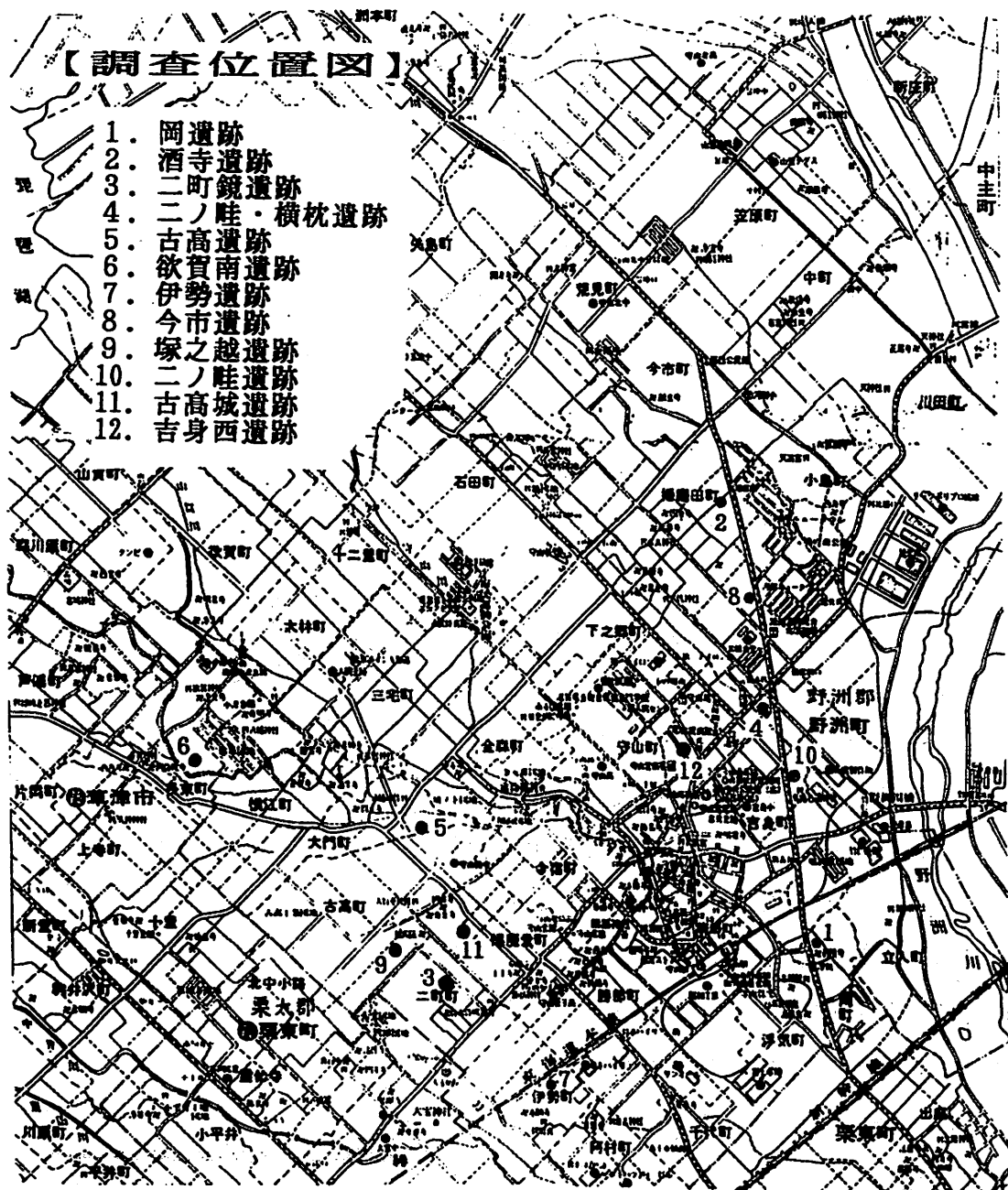


つ配置されています（屋根を支える柱は、5本柱であると考えられる）。住居の一辺は、4～5 m、柱間距離は2.2～3 mの規模で、ともに南側が広いことから、この部分が住居の出入口ではないかと考えられます。古墳時代前期の2棟の竪穴住居は、一辺5～6 mの方形住居で、住居内から多量の滑石<sup>かっせき</sup>が出土しました。この内SH-2からは、管玉<sup>くだたま</sup>、白玉<sup>うすだま</sup>などの製品の他、未製品や多量のチップ（削りかす）が見つかり、当時集落内で、滑石を使った玉作りが行なわれていたことがうかがえます。

（小島）

# 【調査位置図】

1. 岡遺跡
2. 酒寺遺跡
3. 二町鏡遺跡
4. 二ノ畦・横枕遺跡
5. 古高遺跡
6. 欲賀南遺跡
7. 伊勢遺跡
8. 今市遺跡
9. 塚之越遺跡
10. 二ノ畦遺跡
11. 古高城遺跡
12. 吉身西遺跡



# ☆ コラム ☆

『“戦い”はあったのかどうか。』 === 下之郷(酒寺)遺跡の調査を通して ===

前回の『乙貞』で紹介した下之郷遺跡の弥生時代中期後半の環濠より出土した弓と盾はなにを物語るのか。これについての想いを述べてみることにします。

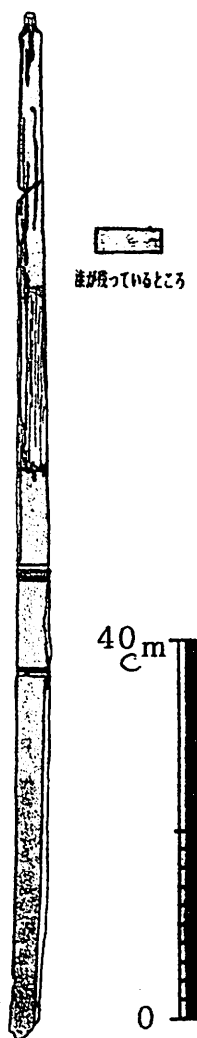
下之郷遺跡は、弥生時代中期後半に出現する集落です。弥生時代中期後半といえば、瀬戸内海沿岸部に高地性集落という守りのムラがつくられた時期です。下之郷遺跡では、防御としての幅5m、深さ3mもある環濠を4～5条めぐらせており、平地においても、まさに守りのムラと言うことができます。

今回発見された弓と盾の破片は、これらの一番外側の環濠より出土しています。弓の特徴については、片面に黒漆を塗り、半分は何も塗っていない状態であり、有機質が付着していたものと思われます。また漆の上には蔓状のセンが巻かれていた痕跡が見うけられます。長さは残存部で1m弱であり、装飾部を中心にシンメトリカルに考えるならば、2m以上であり、飾り弓かつ長弓という非常に優品です。

盾は、10cm×4cm程度の破片ですが、大阪府の鬼鹿川遺跡や服部遺跡出土例から、かなりの大型品であると推定されます。表面のうち片側は水銀朱で真赤に塗られており、小さな穴が列状あるいはランダムにたくさんあけられています。この穴は、列状のものが補強用と考がえられており、点在しているものが民族例より羽根を付けた跡として考えられ、したがってこちらも飾られている盾とらえることが出来ます。

では、最初にもどり考えるなら、下之郷遺跡は環濠をめぐらせた防御集落です。飾られた弓と盾は、この環濠の中で一番外側のものから出土しています。時期は弥生時代中期後半、周りは戦いの時代です。したがって、この弓と盾はなんらかの戦いの中で使われたと推測出来ます。しかし人々が争い殺し合う意味での戦いにおいて、武器に装飾的な要素はいるでしょうか。むしろ殺傷能力に優れた(弓なら力強く遠くに飛ばす、矢なら敵の護りも貫くなど)武器を造り、装飾を施すのは副次的な意味合いではないでしょうか。もし、このような憶測が許されるのなら、この弓と盾は、人と人が刃を交えたなごりとして環濠に捨てられたものではないと思います。もちろん弥生時代中期後半は、西日本的に争いがあり、社会的緊張の高まった時代であることは間違いありません。となりムラとこぜりあいなどもあったでしょう。このような時代背景から考えるなら、この弓と盾は、実際の人と人との殺し合いに使われたものではなく、社会的な緊張の中で生成された「対象を特定出来ない敵」つまり社会不安がキッカケとなった見えない様々な敵に対してのもので、それは実際の武力ではなく、武器を飾りたてることにより、その武力的な力を霊的に高めあげ、「見えない敵」と戦ったと考えることは出来ないでしょうか。

このように、様々な想いをめぐらせてみましたが、ここで重要なことは、弥生時代の中頃において日常生活の道具ではなくて、武器という殺人のための道具を飾りたてるという行為そのものです。それは、人々や社会的混乱を治めるために武器が使われるという時代が生じているということです。(佐々木)



## 『遺跡発掘と戦争』

昨年<sup>ふしめ</sup>は、戦後50年という節目であった。私が遺跡発掘調査に係わってから既に25年が過ぎた。この間、戦争は言葉だけで知っていても体験したことがない事柄<sup>ことば</sup>で身<sup>おほ</sup>に覚えのないことであったように思う。しかしながら、学生の時に調査した皇子山古墳<sup>おほじ やま</sup>で、小銃<sup>しょうじゅう</sup>の薬莢<sup>やっきょう</sup>を掘りだしたことを思い出した。また、大津市の穴太<sup>あなう</sup>で寺院跡の調査をしている時に朝早くから銃を射つ音で目の醒めた記憶がある。自衛隊<sup>じえいたい</sup>の訓練であった。話は変わるが、昭和60年に発掘調査を行っていた下之郷町<sup>しものごう</sup>地先で弥生時代中期の巨大な集落を発見した。その周りに掘られた大きな溝<sup>かんごう</sup>（環濠）から石の鏃<sup>やじり</sup>を多数見つけたが、最近になってこの石鏃を再点検したところ、集落跡内部から出土する石鏃には、打製の鏃が時々見つかるのに、集落跡の外側では、磨製の石鏃しか見つからないことがわかったのである。この下之郷遺跡では、他にも武器（石の剣、戈、弓、盾など）がたくさん出土しており、戦争や争いがあったのではないかと考えさせる遺跡である。二つの話は、直接結びつくものではないかもしれないが、私にとっては2000年の時を隔てての戦争という言葉に繋がる重要な体験である。つまり、下之郷遺跡ではまだ戦争の実態は明らかではないが、環濠の内側からは磨製の石鏃が外に向って射たれ、外からは、打製の石鏃が射ちこまれたのではないかとと思われるのです。また、薬莢や銃声は戦争ではないが、それに関連するものと言えるものではないかと思われる。人が人を攻撃して殺傷するのは争いや戦いであることは明らかで、憎しみという特別の感情をもたなくても殺傷する行為になるのです。戦争は、人を殺傷する訓練が人間の感情とは関係なく行なわれるようになった時点で発生した行為ではないかと思えますし、貧富<sup>ひんぷ</sup>や権力の差を発生させた弥生時代のころにはじまったのではないのでしょうか。戦争とは全く非生産的な行為ですが、これを認めてきた歴史をこの50年を機会に反省し、また戦争を行ってきた歴史を学ぶ機会にしたいものです。

